45

「感冒」疾患名の起源について

木村　丹
木村内科医院

一九九八年に発刊されたインフルエンザの解説書に「感冒はオランダ語のカンバウ（かぜ）からきたものと思われる。」と記述されていた。これは後に誤りと確認したが、この文章が調査の契機となり、『感冒』という疾患名の起源について探った。「流行性感冒」が一九〇〇年（明治二十三）に初めて使用されたことは富士川游著の「日本疾病史」に示されており、定説になっている。その中で「天行感冒」や「時気感冒」という疾患名が江戸時代の医学書に記載されたとあるが、『感冒』がいつ頃から使用されたかの説明はない。二〇〇三年中津市で開かれた医史学会関西支部会で、室町時代（一三三八―一五七三）の末期に中国（明）に留学した田代三喜と曲直瀬道三の著書「三喜直指篇」と「啓迪集」「師語録」に『感冒』が存在することを発表した。その後さらに遡って調べた。

曲直瀬―田代の二百年前、室町時代初期の南北朝時代（一三三六―一三九二）に僧有林が著した「福田方（一三六〇年頃発刊）」の写本の復刻版（正宗敦夫編纂校訂一九三六年刊）に、『感冒』を見出した。

巻の四　中風の項に「…五積散風寒感冒肩〇掲急発熱頭痛…」

巻の六　傷寒の項に「…五積散證云感冒風寒肩背拘急発熱頭疼…」、「交加散…感冒二煎メ服二多く効アリ」

巻の七　咳嗽の項に「三拗湯…冬月寒気感冒暴嗽痰ヲハキ喘スルヲ治ス…」との記載があった。

さらに遡り、鎌倉時代（一一九二―一三三三）末期に梶原性全が執筆した「頓医抄」と「萬安方」について、江戸時代の写本の復刻版（石原明解題一九八六年刊）を調べた。

「頓医抄」五〇巻は漢字かな混じりに書かれた医書で、中国の「諸病源候論」（巣元方著　六一〇頃刊）を引用し、一三〇四年頃完成したといわれる。

巻の六　傷寒の下　大黄の説明の部分に「…敗毒散

ハ性涼若陰陽感冒セラレテ寒熱相交ラバ五積敗毒ノ二ヲ等分二合テ服セヨ…」（復刻版頁一二四記号Ⅳ五〇）の一か所に『感冒』が見出された。

「萬安方」六二巻は、先に執筆した「頓医抄」をさらに詳細にして漢文で書かれたもので、一三二七年頃に完成したといわれる。

巻の六　傷寒門惣〇　上　「発熱人物謂之感冒不知其脈浮盛…」（復刻版頁一二三Ⅵ十五）

巻の六　傷寒十勧「感冒被風吹霎〇則洒然骨寒毛起…」（復刻版頁一二九Ⅵ四一）

巻の六　傷寒十勧「労倦発熱頭痛続覚感冒即宜服之…」（復刻版一三一Ⅵ五〇）

巻の六　傷寒十勧「産後発熱或往来寒熱不問感冒風寒…」（復刻版頁一三七Ⅵ七二）

巻の六　傷寒十勧「参蘇飲　治感冒発熱頭疼或因痰飲凝節兼以為熱…」（復刻版頁一三八Ⅵ七六）

巻の六　傷寒十勧「…服此以熱退為度若因感冒亦如服養胃…」（復刻版頁一三九Ⅵ七九）

巻の六　傷寒十勧「…尋常感冒風寒頭目昏重鼻流清涕加川…」（復刻版頁一三九Ⅵ八〇）、

計七か所に『感冒』の疾患名が存在した。

中国では北宋の時代（九六〇―一一二七）の「仁斎直指」に『感冒』名がある。

平安時代に書かれた日本最古の医学書といわれる丹波康頼著の「医心方」の復刻版（槇佐知子全訳精解一九九三年刊）に『感冒』の疾患名を見出すことはできなかった。但し次のような文言があった。巻十四蘇生・傷寒篇の項に「病源論云…君子固密則不傷於寒夫觸冒者乃為傷之気…」。

『感冒』の疾患名は中国で発祥し、後に日本に輸入されたと考えられる。わが国での最初の使用は今のところ「頓医抄」といえる。